
東方炎貝時 ~ The shellfish of the sky.

リョク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方炎貝時 The shellfish of the sky.

【Nコード】

N8635Y

【作者名】

リヨク

【あらすじ】

未来での戦いも終わり過去に戻る事となった沢田綱吉。だが着いた場所は幻想郷！？

*これは東方炎貝時の再構成のようなものです、前作とは違い原作沿いになります。

幻想入り来る！

ようやく……………終れるんだ！！

過去に帰れるんだ！！！！

俺、沢田綱吉はそう思っていた……………。

本当に……………あんな事になるなんて……………これっぽっちも思っていなかったんだ。

「……………ここ何処ー！！？」

現れた場所は何の変哲も無い異常に長いだけのただの階段。
しかも現れた場所が悪かったのか足を踏み外しそのまま下まで転がり落ちた。

「いってーッ！！！！？」

これは流石に痛い、うん痛いッ！！
見てるだけで痛くなってくる！！

「いってー！！すげー痛い！！！」

体中に激痛が走る。そしてすぐに収まり、上を、階段を見上げた。
沢田綱吉、通称ツナは階段を見てた。

「長ッ！！！」

ここでも突っ込みを入れる、つまりそれだけ長いと言うことだ。

「・・・・・・・・登った方が良いかな？」

ツナの持つ技能『超直感』がこの階段を登った方が良いとつづけていた。仕方なく『超直感』に従い、そのまま登る事となった。

それから三時間後・・・・・・・・

「・・・・・・・・いつになったら着くんだよ」

・・・・・・・・さすがに歩き疲れたのか、少しやさぐれてきている。

すでに明るかった空は暗くなり、星が出ていた。
その星空はとても美しく、都会じゃあまず見られないほど神秘的だった。

「・・・・・・・・綺麗だ・・・・・・・・」

ツナは無意識の内に呟いていた。いきなり一人でこの世界に投げ出され、仲間もおらず、心細かった筈だがその美しさに見とれていたのだ。

・・・グルルッ！

いきなり響いた獣の唸り声・・・。。。

ツナは唸り声を聞くと服の内側から手袋と薬を取り出した、若干震えていたが・・・。。。。。

階段の両幅は深い森になっている、これではさっき迄の美しかった夜空は今では不気味にしか感じないだろう。

右の森ががさがさと音を立てて揺れる・・・。。。。。

ツナの体に緊張が走る。

そして森から獣が現れた。

獣の正体は熊だった。

「なっ！！？」

ツナは声をあげた。

ツナが声をあげたのと同時に熊は走り出し、ツナを体当たりでブッ飛ばした。

ツナはそのままブッ飛ばされ木に当たる、その木は簡単にへし折れ、砂煙をあげる。

普段のツナならこんな事にはならない。

すぐさま逃げ出すだろう。

だがツナは逃げなかった、正確には動揺して隙を作りそこをつけこまれ、攻撃されたのだ。

何故動揺したか？

それは熊の目が三つあったからだ！

それだけでなく体も普通の熊に比べて三倍の大きさ、毛並みも赤く綺麗に生え揃った歯は明らかに血がベツトリと塗られていた。

熊は本当にただの熊ではなかったのだ。

そして熊はぶつ飛ばした人間に喰おうとトドメをさしに煙が舞い上がって場所に向かった。

だが彼も普通の人間ではない。

煙が上がっている場所に淡く光る橙色の炎が突如表れた。
そして炎を纏った拳がいとも簡単に熊を殴り飛ばした。

「……………」

煙から出てきたのは額に炎を燈した沢田綱吉だった。

『ハイパー死ぬ気モード
超死ぬ気化』 自らの潜在能力、リミッターを外し内面的感覚である超直感等の感覚を上げ生命エネルギーである死ぬ気の炎を放出する状態……………」

ドーピングみたいなものではあるがあくまでも自身が鍛えてこそ意味があるものだ。

「……普通に倒すつもりだったんだが……」

ツナは目の前の熊を見据えた。

熊はまだピンピンとしていた、だが先ほどまでの捕食者としての顔は無い……今は戦う顔だった。

二つの足で立ち、鋭利な爪を伸ばし紫色の光を纏わせていた。

「死ぬ気の炎じゃない？」

「ガアアアアアアアアアアア！！！」

熊はツナに襲い掛かる！！

だがツナはそれを右手のグローブで防ぎ熊の腹に拳を決めた。

熊は血を吐きそのまま上にぶっ飛ばした。

熊は綺麗な曲線を描き、森まで飛ばされた。

「……なんだっただ？今の力は……」

ツナは少しだけ右手を庇いながら呟いた。

熊との戦いでツナは右手で防いだがその衝撃で右腕がいかれたのだ。単純に防いだように見えたが完全に守れたのはイクスグロブだけでその衝撃は完全に響いていたのだ。

ツナは上を見て……

「このままだったら空を飛んだほうが早いな」……

そう呟いた。

炎の推進力で空を飛んだが右手がまだ治っていないかった為変な方に飛んだりしたが何とか上にたどり着く事が出来た。

「……………疲れたッ！！！」

ツナはハイパー死ぬ気モード超死ぬ気化を解き息を吐いた。

右手は少しだが動いていた、治り始めてきているのだろう。
そしてツナは目の前にある建物を見た。

それは……………

「神社？」

それは神社だった、だが小さかった。
あくまで神社としての広さで住居としては申し分が無かった。

「……………神社だから取り合えずお金を……………」

誰もがする行動をする。

「……………三百円しかない……………」

なけなしの三百円、過去のツナの世界ならまだしも未来で得たなけなしの三百円……………
それを賽銭箱に入れる。

「トッー」

明らかに何も入っていない空っぽの音が響いた。

「……………」

流石のツナも何も言わなくなってしまった。
ツナは取り合えず座ろうとしたが……………。

たたたたたたた……

「お賽銭……………!!」

神社から出てきたのは白い着物を着た少女だった。
明らかに今寝ようとしていたと言っ感じだった。

少女は啞然としているツナを無視し、賽銭箱を見た。

「三百円入ってる……………」

少しだけ嬉しそうに賽銭箱から三百円を取る。

「……………ありがとう」

少女はそう言っと、頭を下げる。

「……………あ、うん……………どういたしまして」

ツナも頭を下げる……………。

「えっと、ここ何処なんですか？」

ツナは早く元の並森に戻りたいがために少女に聞く。

「外来人……………」

少女はそう呟いた。

「へ？今何て」

「まあ良いわ、中に入りなさい……………話はそこで聞くから」

そう言つて少女はツナを神社に招きいれた。

「人と妖怪が住まう地——！！？」

「うるさいわよ——！」

「ごめんなさい……………」

少女、博麗霊夢は頭を抱えていた。
それはツナが原因である。

「普通の神隠しならまだしも時間旅行中にここに流れ着くって……
……私の力で返す事出来ないじゃない!!」

「……………ごめんなさい」

この二人は互いの事を話した。

霊夢は幻想郷、神隠し、妖怪の事を、ツナは十年バズーカで未来に行き戦った事を……………。

ツナはだいぶ省略しているが……………話せるところまでなら話した。

「まあ良いわ、暫く泊まりなさい」

「え？良いの!!?」

ツナは霊夢の言葉を聞いた。

「まあアンタからはお賽銭貰ってるしそれくらいはしないとね」

こうして、ボンゴレ十代目沢田綱吉の幻想入りが始まった。

死ぬ気の炎

空をかけるのは巨大な龍……………

「で、でかー！！！！？」

それに反応する一人の人間……………
龍は吼える、それだけで大気が軋むほど……………
そして龍には一本の剣が刺さっていた。

「……………夢か……………」

ツナは目を覚ました、寝ていた場所は少し狭いだけの和室だった。

「なんだっ たんだ？あの夢……………」

ツナは取り合えず布団から起き、顔を洗う為に部屋から出た。
そのまま外にある井戸に向かう。

「うゝ、さむ……………」

外の気温は寒く、枯葉が目立っていた。

すでに11月………寒いのはしょうがないはずだ、しかもここには暖房などの器具が無いのだ。

ツナは井戸水を汲み、そのまま手で掬う………。
そして顔につけた。

「……………つめたッ!!」

井戸水は冷たくツナの肌を刺す。
その冷たさに耐えながら顔を洗い、タオルで顔を拭く。

「おはよー」

ツナが顔を洗い終わったと同時に霊夢が襖を開け現れた。
そして白い着物が少しだけ肌蹴っていた………初心なツナはそれに顔を真赤にする。

「ちょ!服肌蹴てる!!!!」

「私も顔洗うからどいて」

ツナの説得も通じず霊夢がツナを押しつけて井戸水に手を突っ込んだ。

「……………つめたッ!!」

これまた同じ反応をした。

「もぐもぐ」

「むぐむぐ」

霊夢とツナは朝食の焼き魚を食べていた。
だがツナは顔を真赤にしていた。

今の霊夢の姿は赤と白の脇が無い巫女服とセーラー服を混ぜ合わせたかの様な物だった。
それにツナは会った時は夜で暗かった為顔を良く見ていなかったのだ。

霊夢の容姿はかなりの美少女だ、それを見て顔を真赤にするツナは悪くない。

そして二人は食べ終わり、少しだけ時間が過ぎた。

「じゃあ行くわよ」

唐突に霊夢が言った。

「何処に行くんだよ……………」

「香霖堂よ、色々な物が売ってるわ」

その後に「服も買わないといけないだろうしね」と付け加えた。
その言葉にツナも納得した。

「じゃあ行くわよ」

霊夢は空を飛んだ……………。

「何で空飛べるの！！！！？」

「あ、そっぴゃアンタ外来人だったわね」

霊夢はそう言っただけで戻ってきた。

「いや、空は飛べるんだけど……………」

「なら早くしなさい」

「わ、分かったよ」

そう言っただけで手袋を着け、死ぬ気丸を飲む。
額から炎を出し、オレンジ色の瞳になる。

「行くぞ」

「何で性格が変わるのよ！」

明らかに性格が変わったようなツナに霊夢も驚愕する…………。

「まあ良いわ…………じゃあ行くわよ」

そう言って二人は博麗神社から飛び去る。

ツナは死ぬ気の炎を消し、目の前にある店を見た。

「ここが香霖堂よ」

「……………こんな所に人が来るの？」

「めったに来ないわよ」

香霖堂は魔法の森の中にあるため滅多に人間の客は来ない。妖怪ですらあんまり来ないのだ。

「居るー？霖之助さん」

霊夢は扉を開け、店の中に入る。
中には白い髪をした眼鏡の美青年が居た。

「……………ああ、霊夢か……………」

青年は霊夢を見ると返事をした。

「後ろの君は？」

「あ、俺……………いや僕は沢田綱吉です」

「別に良いよ、僕は森近霖之助だよ、よろしくね綱吉君」

「こ、こちらこそお願いします！」

ツナは霖之助と握手をした。

そして霖之助は霊夢の方を向き直した。

「で、今日は何の用だい？」

「ツナに合う服が欲しいわ、それと……………」

そう言つて霊夢は服からある物を取り出した。

それは鎖に通された壊れた指輪だった。

「それは！」

ツナが驚愕した、何時の間に取られたのかと……………。

「アンタが寝た時に取つたのよ、壊れたままじゃ駄目だと思ったか

ら」

「……………ありがとう」

ツナは霊夢に感謝した。

それは未来での戦いで命を落しかけたのを救ったリングだからだ。
素直に感謝された霊夢は顔を少し赤くした。

「……………別に」

霖之助も素直に驚いていた、あの鉄面皮である霊夢が顔を赤くした
と言う事実いだ。

「（へえ、霊夢が顔を赤くするなんて……………）」

霖之助はそれに少しだけ嬉しそうだった。

霊夢が周りからどんな扱いをされているかを知っているからだ。

「じゃあこの指輪を直せばいいんだね」

そう言って霊夢から指輪を受け取る。

「……………この指輪は……………」

霖之助はそれを持った瞬間少し考え、ある部屋に立てこもった。

「すぐ終るから、本でも読んで待つてるといいわ」

そう言って霊夢はすぐ近くにある本棚に手を伸ばし本をとった。
ツナも本を取った。

「あ、これ最新刊だ！」

ツナは漫画を夢中で読み始めた。

1時間近く二人は読んでいた。

「……………終わったよ」

霖之助は部屋から出てきた。
持ってる指輪は完全に修復されていた。

「完璧に直ってる！！」

「ああ、ちゃんと直したからね」

そう言つて、霖之助はリングをツナに渡す。
それを返してもらったツナはそのリングを霊夢に渡した。

「……………何のつもり？」

「えっと、家に泊めさせてくれたから……………その御礼で」

「……………まあいいわ、貰っておくわ」

そのリングを指に通す霊夢……………。

「じゃあね、霖之助さん」

「え！？お金必要じゃないの！？」

「いや、いいんだよ…………あの指輪を見たからね」

そう言つて、霊夢とツナは香霖堂から去つていった。

その後姿を見ていた霖之助は…………、

「…………君なら、霊夢を変えられるかもしれない……………」

そう呟いた。

「…………さてと、」

霖之助は店の中に入りある部屋に行く…………。

「…………作ってみようか」

その部屋には橙、赤、青、藍、黄、紫、緑の石があった。

「……………それでさっきの力は何？」

博麗神社に帰ってきた霊夢とツナ。

霊夢は早速ツナに死ぬ気の炎の事を聞こうとした。

「……………今言わなくても……………」

「今言いなさい」

訂正、聞き出していた。

そしてツナは話せるだけ話した。

「へえ、生命エネルギーを炎にして放出するね」

それを聞いて霊夢はツナに手を差し出した。

「取り合えずその薬くらい渡しなさい」

「なんでー！！？」

「便利じゃない、それ」

「いや危険だよー！」

「いいから渡しなさいー！」

この後3時間に渡るいい争いの結果、5つの死ぬ気丸は霊夢の手に渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8635y/>

東方炎貝時 ~ The shellfish of the sky.

2011年11月26日21時53分発行